

記憶の交差点で出逢う、わたしたちの現在地

2024年に始動したアートプロジェクト「ハロー地球!」、今年も無事に2年目を締めくくることができました。1年目の終わりには、「『わたし』という閉じられた世界に、新たな接続の窓を開く」場としてこのプロジェクトを表していたのですが、今年場の空気感を表すならば、「誰かの記憶に住まう物語と出逢う場」になるのではと思っています。一見、一人と一人が別々に生きている日々の中で、「ああ、私以外の誰かも、それぞれに物語を抱えて、時にはそれらに縛られながらも、確かに生きている」と、そう実感する瞬間が、たくさんあったように感じているからです。それぞれの生きてきた時間が交差する場が生まれたことに感慨深さを感じながら、その意味や意義以上に、表現することの奥深さ、誰かの物語に触れることのかげがえのなさのようなものを、身体いっぱいでも実感する時間でした。

月1度、手を動かしながら、生活や記憶、身近な社会との関係性など、私たちを取り巻く世界について、多様な角度から語り、表現し、考える場、「ハロー地球!」。タイトルに込められているのは、「この地球に住んでいるって、どういうことだったっけ?」ということに改めて思いを馳せながら、もう一度新たな気持ちで地球に降り立つ、そんな場になっていきたいという想いです。大人になるにつれて、日々のやらなければならないこと、身につけてしまった価値観や、生活することに付随するさまざまな雑事の中で、純粋な好奇心や探究心は薄れていってしまうことが多い日常。そんな中でも、世界の楽しみ方を、もう一度思い出せないだろうか.....そんな目論見です。今年、ヴェネチアビエンナーレにも出展された直島在住の現代アーティスト・下道基行さんにも、「合宿長」として2泊3日の宿泊プログラムに関わっていただき、新たな息吹も吹き込んでいただきました。

年齢も職業も住む場所も、はたまた集った目的も異なる皆さんとつくりあげた半年間。事前の告知でも、何をやるのかがぼんやりとしかわからない、謎のプロジェクト。そんな未知の場に参加くださったお一人が、「自分の外の認識を広げているはずが、いつの間にか自分の核心に思考が戻ってくるような不思議な時間でした」と語っていただきました。自分の過去や傾向などを正面から深掘りするのではなく、身の回りの世界、あるいは自分ではない誰かをつぶさに観察することで浮き上がってくる、無意識の自己の残像。一見不要な迂回路を通ることで、今という時間を生きている自分の核のような何かに帰ってくる—そんな不思議な場が生まれていたのかもしれない。

ウェルビーイングを説くプログラムが増えてきている中で、「そもそも『ビーイング』って何だろう?」「私たちは今どんな世界に、どんな人たちと共にいるんだろう?」という問いに立ち戻り、一人にとってのかげがえのない記憶や想い、願いが、誰かの記憶と交差した時間。無数の物語の網目の中にある私たちの現在地を確かに感じながら、また次なる目的地へと、ささやかな物語を紡いでいく旅が、始まります。

アーティスト・プロジェクトディレクター | 山際真奈 (やまぎわ・まな)
カリフォルニアで学生時代を過ごし、領域横断的なアートプラクティスを学ぶ。福武財団を経て、国立新美術館・東京国立近代美術館のミュージアムエデュケーターとして探求・対話・表現のアートプロジェクトや教育プログラムを企画。2023年、長野県に移住し、世界との接点に風穴を開けるアートプロジェクト、「ハロー地球: 未来をつくる、リベラルアーツ部」や「スザカ写真部」を立ち上げ、主催している。豊かな自然環境を生かした教育プログラム「森ラボ」の企画運営や、46億年の地球史を歩く「ディーブタイムウォーク」と舞踊を掛け合わせたプロジェクトも展開。アーティストとしては、音楽や映像を中心とした制作活動に取り組みながら、古民家や高原など様々な場所での発表を続けている。上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科卒業 (視覚文化論・修士)。須坂市在住。

アーティスト | 北澤麻希 (きたざわ・まき)
幼少期に母が営んでいた手芸店で、平面の布が立体になり、いろいろなものが作れることに感動し、作ることが大好きになる。高校卒業後、ロンドンの美術大学に進学し、卒業後はイッセイミヤケにてテキスタイルやアクセサリーの企画を担当。出産をきっかけに、衣食住を自分の手でできることは作っていききたいと思い、土が身近にある場所に移住。感情から豊かなコミュニケーションを生むことをテーマに、専門学校の非常勤講師として教えたり、子供たちに向けたものづくりと表現のワークショップを行っている。白馬村在住。



「ハロー地球 未来をつくる、リベラルアーツ部」は信州須坂で始動したアートプロジェクト

10代~70代の“部員”が 様々な表現と対話を通して 日々の生活に潜む「物語」を掘り起こしながら 世界ともう一度出逢う場を 半年間におたって作りあげました

2025 Report

第1回 2025年5月17日(土)
なんでもない日のドローイング
《日々を彩る》

初回ゲストは、ギャラリーオーナーの岡村知美さん。なんでもない普通の1日=24時間の中で、10分以上やっていることと、その一つ一つの行動で感じている感情を書き出し、脳科学の視点からそれら进行分析。嫌々やっていることも、「報酬思考=こぼろび」に変換し、そのイメージを1日を表す丸いキャンバスに描いていきます。本当はかけがえのない「なんでもない日」を、一緒に手を動かし振り返りながら、それぞれの記憶を交換。共にした温かい時間の中から、限りある日々を彩り直す筆をいただいた気がしています。



第2回 2025年6月14日(土)
出せなかった手紙を書く
《物語り方の可能性》

今回のゲストは、映像作家の池端規恵子さん。記憶の中にある他者との“関係性の編み直し”を通して、誰の中にも存在する「物語」を開示する、貴重で忘れられない時間になりました。近い家族や、友達、亡くなった誰かなど、出すことのできなかった手紙を想像し、執筆。さらにその相手からの“架空の返事”も創作することで、フィクションとしての空間を立ち上げながら記憶を再編成するプロセスは、あらゆる創造の土台のような時間であると同時に、自分を取り巻く関係性を物語直す、儀式のような時間でもありました。



第3回 2025年7月19日(土)
世界に一枚、夏のワンピース
《衣服にまつわる記憶》

今回のゲストは、プログラム全体の共同企画者でもあり、元ISSAY MIYAKEデザイナーの北澤麻希さん。持ち寄った布を裁断するところから仕上げまで、丁寧にご指導いただきながら、夏のワンピースを仕上げていきました。手を動かしながら、普段なかなか人に聞けないことを紙に書き、おみくじスタイルでおしゃべり。日々の気になるを言葉にしなが(船舶免許から豊胸手術の話まで…) みんなそんなこと考えていたのね、やっぱりそうだよ、などなど、夏の暑さを吹き飛ばす井戸端会議。



第4回 2025年8月10日(日)
家庭料理と物語
《誰かの思い出》

中国出身の料理家ニーナさんをお招きし、本格餃子を皮から作りながら「料理と記憶」を深掘り。人生の時々で食べていたものを、特大布袋にフードヒストリーとして書いたり(いなご、ケバブ、アラビックヤマト、猪、スーパーのお寿司…)、忘れられない家庭料理の味を共有したりと、こはんから見えてくる多種多様な物語に、一人一人がそれぞれの時間を生きていることを実感。当たり前なようでいて、当たり前ではない、「みんないる」感覚が、この場を通してつくりあげられていることを感じながら。



THE ART PROJECT REPORT! 1回一挙一語 2025

第5回 2025年9月27日(土)
みんなの哲学対話
《生き様、死に様》

哲学研究家の石山秀明さんをゲストに、激渋テーマで哲学対話。哲学対話とは、答えが1つでない問いについて考え、脱線したり妄想したりしながら対話する場。この日は、哲学猛者の大先輩方にもおこしいいただき、20~70代までの全世代が参加する白熱回。「死んでもいい状況って?」「死に様=生き様?」「そもそも生をコントロールできる?」等々、絶えない問いについて和やかに語らいながら、それぞれの生きてきた時間が垣間見える濃密な時間。多世代の私達の人生が交差する、忘れ難い場となりました。



第6回 2025年10月11日(土)~13日(日)
高原表現合宿
《2泊3日のアート合宿：合宿長・下道基行》

ヴェネチアビエンナーレにも参加された、直島在住の現代アーティスト・下道基行氏を「合宿長」に始まった高原表現合宿。霧に包まれた高原で、描いたり、対話したり、何もしないをしたり。2日目の中盤にいよいよミッションが発表され、「100年後の自画像」にまつわる物語執筆に挑むことに。一緒に食べて、過ごしての只中で、12才~40代まで各々が生きてきた時間のその先にある世界を想像しながら、自分だけの物語の世界に入っていきます。ミッションの他にも、高原散策や朝の木漏れ日ヨガ、夜の焚き火や星空観察、山の幸満載のお食事など、高原ならではの時間を過ごしながら、あつという間の3日目。完成した作品を製本していく朝のペンションは、まるで即席の編集部。表紙には、「ノールック」で手元を見ずに描いたそれぞれの自画像を挿入し、全員分の文章を合わせて1冊のZINEにしていきます。最後は静かに作品を読み合い、確かに現れる筆者の生きてきた時間やその片鱗を物語に感じながら、私達のビーイング=生の在り方のようなものを、作品を通して感じる共犯めいた時間となりました。



期間：2025年5月~12月
 場所：ギャラリー変化大名、KAYA Studio、Uラボ、CHICHIPI
 ペンションスタートライン
 人数：15名(10代以上)
 料金：1500円(高校生500円)
 主催：〇〇Emergence Lab〇
 協力：信州アーツカウンシル

開催概要

第7回 2025年12月27日(土)
ポットラックパーティ
《手元から見える世界》

最終回は、食べ物を持ち寄ってのポットラックパーティ。各々が持ち寄った食べ物(鍋が4種も…)一年を「巨大双六」にして振り返ったり、即興ライブ演奏があったり、古着試着大会をしたりと、今年も生きてきた自分達を祝福するお祭りです。新たなご縁と共に、またここから、次なる旅路へと。



“部員”のこえ

- 自分の外の認識を広げているはずが、いつの間にか自分の核心に思考が戻ってくるような、不思議な時間でした。(30代女性)
- 今まで全く関わりがなかった人と一緒に、自分について考えたり表現するワークや、手を動かしてモノを作るワーク、おしゃべりした事が、とっても楽しかったです。皆さんが個性的で、もっとお話ししたいと思う方々ばかりでした。(50代女性)

